

徳富蘇峰の印影散用箋

— 熊本の歴史資料(二) —

大島 明秀

はじめに

徳富蘇峰をめぐる逸話として、入手した活字を用いて実際に印刷を行ったり、和紙を自身の手で漉いてみたり、印影を収集したり、といった趣味的な活動に出精していた姿が今日に聞こえている。ただ、蘇峰の書物に対する愛着や鑑識眼については周知されているものの、右のような書物の周辺にまで及ぶ趣味については、これまで見落とされてきたようである。以上を踏まえて、本稿では各種印影が散りばめられた蘇峰の用箋に着目してみたい。

一、後藤是山宛書翰に用いられた蘇峰の印影散用箋について
熊本市後藤是山記念館には、蘇峰からは山に宛てた一定数の書翰が収蔵されており、それらに用いられた書翰箋は多岐にわたる。中でも、昭和十二年(一九二七)四月五日の日付を有する書翰(ふ—317)に使用された便箋は一段独特で、背景に二二顆の印影をあしらった、趣向を凝らした逸品である。

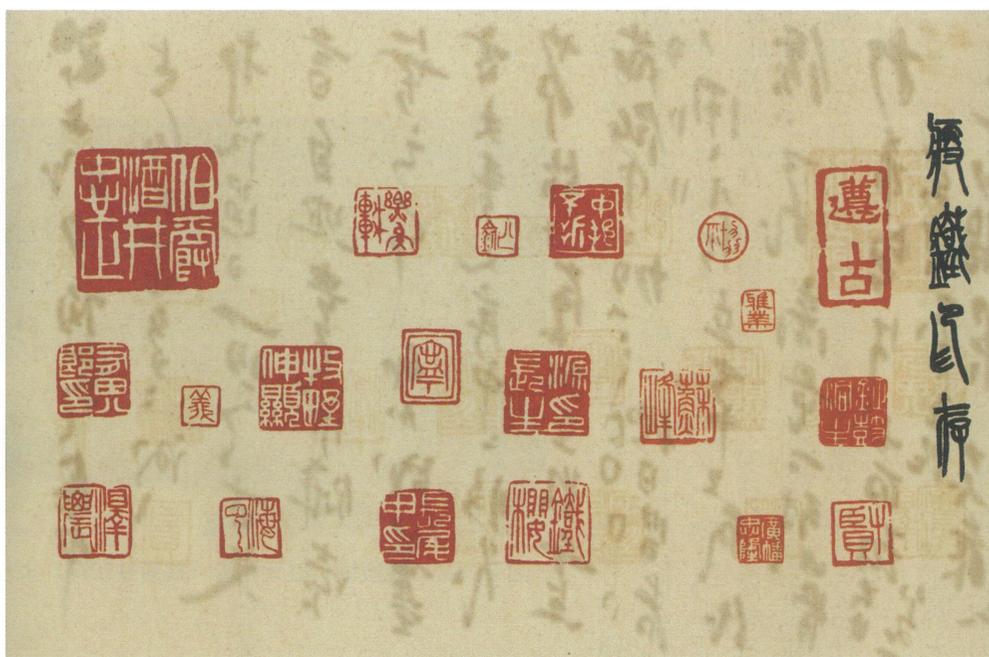


図1 印影散用箋 (後藤是山記念館蔵、ふ—317)

なお、本書翰が古文書購入をめぐる内容であることから、蘇峰が「文書と印」の連関・連想を意図して当該用箋を選択したとの推察も可能であるが、実情は不明である。

さて、各種印影と用箋の作成背景を読み解くために、手始めに用箋の右方に一際大きく刷られた印影「瘦鉄印存」に目を向けると、氷鉄、苦鉄（呉昌碩）とともに「三鉄」と称せられた、中国の画家で、とりわけ篆刻家として名高い銭瘦鉄（*Qian Lou Tie*、一八九七～一九六七）が印主である事実に行き着く。



図2-1 一九二七年、西泠印社にて。左から銭瘦鉄、呉臧堪、呉昌碩、瘦鉄夫人である韓秀（銭大礼編『銭瘦鉄印存』より）



図2-2 銭瘦鉄（銭大礼編『銭瘦鉄印存』より）

これを手掛かりにその他印影を調べると、残り二〇顆のうち八顆が、近年編まれた『銭瘦鉄印存』に確認できることが判明した²⁾。あとの一二顆についてもその字形や風情は『銭瘦鉄印存』中のそれと異なるものではなく、ここから二一顆の印影は全て瘦鉄の刻印と判断でき、用箋はいわば瘦鉄刻印譜と呼びうる仕上がりとなっている。

ここで銭瘦鉄とその篆刻および日本美術界との関わりを確認しておく、瘦鉄は大正末年に京都の日本画

家橋本関雪が所有する「白沙村荘」に逗留したが、寄寓中に関雪やその周辺の画家の印を大量に刻した。例えば、関雪の瘦鉄刻印は六六顆、歌人会津八一の瘦鉄刻印は三一顆を数えるほどである。また、瘦鉄は大正一二年（一九二三）から昭和一二年（一九三七）まで中国と日本を往来しつつ、谷崎潤一郎をはじめとする日本の文化人たちと交流を深め、その印を刻し、さらには後援を受けて、大阪、京都、東京、新潟で書画篆刻の個展を開催した³。

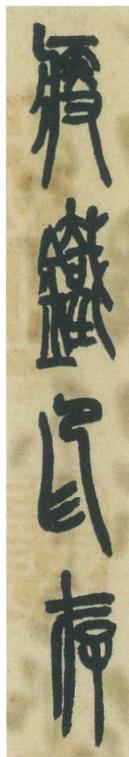
ともあれ、当代随一の篆刻家であった瘦鉄に対する着目は蘇峰の眼力をもってすれば当然のことであり、また、その印譜を（さらに収集して）一冊の本として重々しく仕立てるのではなく、肩肘張らない日用品、それも使い捨てる用箋の意匠とする趣向は軽妙にして粹である。

二、印文と印主

前述したように、用箋には総計二一顆に及ぶ印影が散りばめられているが、一瞥して配列に規則性を見出しがたい。よって、以下各種印影を提示するにあたっては、用箋の最右行に配置されているものから始め、上方から下方に追い、次におよそ一行左方の印を上方から下方に、という順に紹介した。なお、各印影の法

量は区々であるが、読者の便宜上できるだけ印影画像の大きさを揃えて示した。ついで印文を付したが、その際旧字は現在通用するものに改めた。続いて印主とその略歴を記し、最後に『銭瘦鉄印存』に掲載されているものについてはその旨を記した⁴。

①



印文…「瘦鉄印存」

印主…銭瘦鉄

※『銭瘦鉄印存』にあり

②



印文…「遵古」

印主…不明

※『銭瘦鉄印存』にあり



③

印文：「鉦鼓洞主」

印主：横山大観。日本画家。東京美術学校助教授、帝国美術院会員

※『錢瘦鉄印存』にあり



④

印文：「賢」

印主：不明

※『錢瘦鉄印存』にあり



⑤

印文：「協平」

印主：丹呉協平。旧中条町（新潟県胎内市）の豪農丹呉家当主。高校教師



⑥

印文：「雅業」

印主：不明



⑦

印文：「蘇峰」

印主：徳富蘇峰



⑧

印文：「広幡忠隆」

印主：侯爵広幡家当主、貴族院侯爵議員、皇后宮大夫

※『錢瘦鉄印存』にあり



⑨

印文：「中村不折」

印主：洋画家、書家。太平洋美術学校校長、帝国美術院会員



⑩

印文：「源長生印」

印主：小笠原長生。子爵小笠原家当主。海軍中将
※『錢瘦鉄印存』にあり



⑪

印文：「鉄校」

印主：小笠原長生。⑩参照
※『錢瘦鉄印存』にあり



⑫

印文：「八一之靈」

印主：会津八一。歌人、書家、美術史家。早稲田大学名誉教授
※『錢瘦鉄印存』にあり



⑬

印文：「寧」

印主：土方寧。東京帝国大学法科大学長、貴族院勅選議員、帝国学士院会員



⑭

印文：「長尾甲印」

印主：長尾雨山。漢学者、書家、画家、篆刻家。東京師範学校教授
※『錢瘦鉄印存』にあり



⑮

印文：「樂天軒」

印主：『国民の友』編纂にも携わった民友社社員中村修一か



⑯

印文：「牧野伸顕」

印主：外交官、農商務大臣、宮内大臣、内大臣。伯爵を授けられた



⑰

印文：「海雲」

印主：第二〇六世東大寺別当上司海雲か



⑱

印文：「義」

印主：不明



⑲

印文：「伯爵酒井忠正」

印主：雅楽頭系酒井家宗家当主。貴族院副議長、農林大臣



⑳

印文：「有田八郎印」

印主：外交官、貴族院勅選議員、衆議院議員

⑳



印文：「沢農」

印主：有田八郎。㉔参照

おわりに

以上、後藤是山宛書翰に使用された徳富蘇峰の用箋を追究したところ、その背景に散りばめられた二一顆に及ぶ印影は、とりわけ篆刻を通して近代日本の美術界で重要な役割を担った銭瘦鉄の（昭和一二年四月五日までに彫られた）刻印であることが判明した。さらに、そのうち一二顆は、これまでに報告されていない新出の印形であった。

書物の周辺、すなわち印刷道具や文具にまで及ぶ愛着と慧眼に基づいて作られた蘇峰の印影散用箋は、その文人的な趣味や感性を物語る資料であるのみならず、同時代に名を馳せたものの、現在は忘却された銭瘦鉄とその印形を後世に伝える確かな記憶でもある。

注

- 1 翻刻については、熊本県立大学歴史学研究室編「地域史料を読む（一）——後藤是山宛徳富蘇峰書翰（二）——」（『国文研究』第六一号、二〇一六年）に提示。
- 2 底本は、呉頤人、銭大札編『銭瘦鉄印存』（上海三聯書店、二〇〇二年）を使用。
- 3 柿木原くみ「銭瘦鉄と谷崎潤一郎の周辺」（『書学書道史研究』第一九号、二〇〇九年）。
- 4 李文駿選編『銭瘦鉄印拳』（上海書画、二〇一五年）には掲載が認められなかった。